

GISECアメリカ研究プロジェクト始動

—— 第一回シンポジウム報告

おおくし ひさよ
大串尚代

(慶應義塾大学文学部准教授)

慶應義塾とアメリカ合衆国の関わりは決して浅くない。安政七（一八六〇）年に咸臨丸に搭乗し初めて海外に出た福澤諭吉は、まず西海岸はサンフランシスコに到着し、当時のアメリカの社会政治制度・文化を目の当たりにした。その後福澤は慶應二（一八六六）年に出版した『西洋事情』にて、アメリカ独立宣言全文の初邦訳を成し遂げている。アメリカの独立理念の根幹をなす「天ノ人ヲ生ズルハ億兆皆同一轍ニテ、之ニ附与スルニ動カス可カラザルノ通義ヲ以テス」というくだりは、やがて手を加えられ、『学問のすゝめ』の有名な冒頭部分にも反映することになる。

年には、福澤はハーバード大学総長チャールズ・エリオットの推薦を受け、黒船指揮官マシュー・ペリー提督の甥の息子トマス・サージェント・ペリーを英文科教授として迎えている。明治三十九（一九〇六）年にはアメリカで活躍した詩人ヨネ・ノグチ（野口米次郎）が英文科主任教授となり、昭和二十七（一九五二）年には同教授の学匠詩人・西脇順三郎がアメリカ出身のノーベル文学賞詩人T・S・エリオットの名詩「荒地」を邦訳、さらに昭和二十八（一九五三）年には同教授・大橋吉之輔が現在の日本アメリカ文学会の母胎創設に携わった。

にもかかわらず、本塾は長くアメリカ研究の基盤となる研究機関に恵まれなかった。しかしながら、本年二〇一一年度を迎えて、竹中平蔵教授（グローバル

キュリティ研究所所長を代表者とする「GISECアメリカ研究プロジェクト」が誕生し、いよいよ本塾におけるアメリカ研究が本格的なスタートを切ったのである。本プロジェクトはすでに塾内に設置されている諸地域研究所とも連携し、グローバルな観点から研究を推進しており、塾内各キャンパスをはじめ、国内外のアメリカ研究機関との研究協力をも視野に入れるものである。

かくして本プロジェクトは記念すべき第一回の公開シンポジウム「グローバル



シンポジウムの様子（写真：小泉由美子、左上も同様）

時代の文学地図」を、十月十五日（土）の午後二時半より北館ホールにおいて行なった（共催：本塾文学部英米文学専攻、藝文学会、日本アメリカ文学会東京支部、文学部科学省科学研究費補助金基盤研究B）。

まず本塾文学部教授・巽孝之氏が開会の辞に代えてGISECAアメリカ研究プロジェクトの設立経緯を説明。続く元オックスフォード大学アメリカ研究所所長であり、現在はシドニー大学英文科教授ポール・ジャイルズ（Paul Giles）氏の基調講演「アメリカ文学を裏返す——環大西洋の海洋風景とグローバルな想像



ポール・ジャイルズ氏の基調講演

界」"Turning American Literature Inside Out: Transatlantic Seascapes and the Global Imaginary"は、従来の北米中心主義的なアメリカ文学史観を批判しながら、大西洋および太平洋を介したヨーロッパやアジアとの文化的交錯を強調。半球的ないしは惑星思考的視線からアメリカ文学地図を塗り替え、これまでのアメリカ文学史的正典——例えばメルヴィル、ホーソン、トウエンなど——の抜本的読み直しを可能にする刺激的で熱のこもった講演となった。質疑応答では、フロアから女性作家の位置づけをめぐる質問が出され、活発な議論が交わされた。

休憩をはさんだのちには、ジャイルズ講演に応答するパネル・デイスカッション。司会を務めた筆者は、十八世紀末に活躍したアメリカ人地理学者ジェディアイア・モースの「天文学的地理研究」を紹介し、建国期のアメリカにおける惑星思考の可能性を模索した。首都大学東京准教授であり、ヘミングウェイ研究者である辻秀雄氏は、批評家ジョージ・スタイナーが提唱した「脱領域」を援用しつつ、モダンズム作家におけるスタイルの

問題を分析。本塾大学院文学研究科博士課程に在籍する加藤有佳織氏は、ネイティブ・アメリカンのルーツを日本に求め、黒船以前に來日したラナルド・マクドナルドの視点から環太平洋文化論を展開。また、イタリア系日本文学者で、現在はシドニー大学で教鞭を執るレベッカ・スター（Rebecca Stier）氏は村上春樹の国際的評価をもとに「世界文学」の枠組を再検討した。そして、本塾名誉教授の高宮利行氏は、近代化に伴って日本に流入してきた西洋文化——建築、スコットランドおよびアイルランド民謡など——を解説し、本塾のキャンパスそのものが文化的連結の結果であることを示唆した。それらすべての発表に対しジャイルズ教授が洞察力あふれるコメントを付して閉会の時間となったが、以後のファカルティクラブにおける懇親会でも、同教授を囲む活発な討議はやむことがなかった。

本プロジェクトは来年以降も引き続き、本塾における新たな地域研究の拠点として、ますます充実した活動を展開して行く予定である。ご期待いただければ幸いである。